

「事後学習」

連携団体

- ・東京都障害者スポーツ協会
- ・日野市ボランティア・センター

2021年2月23日（火・祝）

報告



2月23日（火・祝）、スポーツボランティアプログラムの「事後学習」を南大沢キャンパス91年館において実施しました。開催方法については参加学生と実施方法を検討し、感染症対策をしっかりと行った上で、対面で実施しました。

この「事後学習」では、これまでの活動を振り返り、他のメンバーと共有することで自分自身の想いと向き合ったり、多角的な視点からボランティア活動の効果と意義を考えたりすることで活動を学びと成長につなげたりすることをねらいとしています。連携団体である「東京都障害者スポーツ協会」の市川大貴さん、「日野市ボランティア・センター」の堤彩さんにもお越しいただき、学生の振り返りにご参加いただきました。

「ココロ（キモチ）」の振り返り

最初に「ココロ（キモチ）」に向き合う、感情面の振り返りを行いました。まずは、活動の中で“最も感情が動いた場面”を各自で考え、その後、グループで共有しました。学生からは、「ミーティングを重ねて企画・運営すべて自分たちで行うことで大きな達成感を得ることができた」「コロナ禍でもボランティア活動ができた（オンラインミーティングやハイブリット環境でのイベント実施）」などの話があり、例年通りの活動ができない中でも様々な場面でポジティブな感情になっていたことが分かりました。

さらに、「イベントの企画段階では、考えることがとても多くて大変だった」「例年の活動がなくなったことで連携団体や参加者の方に支えられていたことに気づいた」といった話も出ました。「ネガティブな感情」になったことが、最終的に「ポジティブな感情」になる材料となったそうです。達成感ややりがいのもとになったのは、取組過程での苦労やネガティブな感情だったことが分かりました。ポジティブ・ネガティブな感情がそれぞれ明確に分かれているだけでなく、様々な感情や気持ちが結びつき、自身の成長につながっているようでした。

「アタマ」の振り返り

次に、「アタマ」の振り返りとして、今回取り組んだボランティア活動の効果・意義について各自で考えた後、グループで共有しました。さらに、そこで共有された効果・意義の一つひとつを、①ボランティア自身、②課題の当事者・活動の対象、③活動する組織、④地域・社会、といった対象別に分けて可視化しました。

以下、共有されたアイデアの一部です。★がついているものは、「コロナ禍だからこそ」の効果・意義です。

【①：ボランティア自身にとって】

- ・一から活動を企画して達成する経験ができたこと
- ・学生の思いを込めたプログラムを形にできたこと
- ★オンラインでのコミュニケーションの経験ができたこと
- ★コロナ禍におけるスポーツの新しい可能性を発見できたこと

【②：活動の対象や課題の当事者にとって】

- ・笑顔を見せあい、運動する機会を創ることができたこと
- ★オンライン活動への参加の入り口になった

【③：活動する組織にとって】

- ・活動のバリエーションが広がった
- ・市民に提供するプログラムが増えた
- ★コロナ禍の課外活動の事例になった

【④：地域・社会にとって】

- ・地域と大学生のつながりができたこと
- ★オンラインスポーツの普及のきっかけになった

振り返りの途中では、市川さんからオンラインで実施した「スポーツの集い」などの事例やその背景などを紹介していただきました。今年度は、例年参加していた大会等が全て中止となり、多様な経験ができたわけではありませんでしたが、学生が実施したオンラインスポーツの取組に関連する事例について知ることで、自分たちの取組と比較しながら振り返ることができました。

プログラムの修了

今年度の活動は、これで終了です。プログラムを修了した学生には、修了証をお渡ししました。今年度は新規の学生の募集ができなかったため、活動継続3年目以上の「リーダー」、2年目の「サポーター」学生のみでの活動となりました。

主な活動先であるスポーツ大会が中止となったことから、何度も行ったミーティングを通して、活動の在り方を模索した1年間でもありました。今回新たな発見や気づきがあったことを共有できましたので、それぞれの場所でそれらを生かしていただければと思います。

「事後学習」参加者の声（一部）

- ・プログラム参加者同士が顔を合わせることができなかったが、事後学習を対面で実施し、今年の活動を振り返ることができて良かった。
- ・取り組んでいる時は大変な時もあったが、貴重な1年だったと思えた。今後も新しいことに挑戦していきたい。